

【春日部むかしばなし2】

(1) 翁の経文

今から1300年くらい前のお話です。武州の比企郡（現埼玉県）に未翁と呼ばれるおじさんが住んでいました。毎日未の時刻（午後二時ごろ）に奈良の都に出勤しましたが、一度も遅刻をしなかったため未翁と呼ばれて尊敬されていたのです。



そのころ、利根川のほとりには大きな淵がありました。この淵は龍の都に通じていると言われ、未翁はそこへ行きたいと思っていました。龍の都には飢えや病気から人々を救う宝の珠があるとされていたからです。

そんなある日、淵の底が不思議な光で輝いているのを見た翁は、その晩の夢で龍神に会いました。龍神は

「わたしは長い間おまえを待っていた。たくさんの者を救いたければ、このお経を広めなさい」

とお告げを残して消えました。目が覚めてみると、手の中にはお経が握られています。

そこには

「これを唱えれば願いは必ず叶うであろう」

と書いてありました。しかし、ご神体がなければ人々は信心を起ささないと思った翁は、神にその姿を現したまえと願いました。



すると、突然、空は曇り、雷は喝って、神の姿が宙に現れたのです。

未翁は喜んでこの神の像を造って祀りました。この話に感動した村人は、村の鎮守としてお社を建ててあがめました。

その後、龍の都に続いていると言われた淵は、どんな日照りのときでも干上がらずに田畑を潤しつつけました。一方、未翁はお社を信州（今の長野県）の本田光浄という者に頼むと、比企の岩殿山に登って消えてしまいました。

長い年月の間に淵は埋まり、お社も傾いてしまいましたが、文明3年(1471)に光浄の子孫、正浄がお社（現鷲神社）を再建し、今は小淵の浄春院としてあがめられています。

(2) 蛇女房

昔むかし、太兵衛^{たへえ}という男がひとり寂しく暮らしていました。太兵衛はやさしい人でしたが、どうしたことかお嫁さんがやって来ません。そんなある日、太兵衛は道ばたで一匹の蛇を見つけました。蛇は子どもにいじめられたのか体中傷だらけで、動く力^{そうれんじ}もありません。かわいそうに思った太兵衛は、蛇を崇蓮寺の池に逃がしてあげました。



それからしばらくたった日のことです。太兵衛のもとに、なんとお嫁さんがやってきました。きれいで働き者のお嫁さんでしたが、どうもおかしなことがひとつだけあります。このお嫁さんは夜になるとどこかに出かけ、びしょぬれになって帰ってくるのです。心配になった太兵衛は、ある晩お嫁さんのあとを迫りかけました。すると、お嫁さんは崇蓮寺の池の前まで行き、消えてしまったのです。驚いた太兵衛は慌てて家に戻りました。やがて、帰ってきたお嫁さんは何食わぬ顔をして濡れた髪を乾かしはじめます。



そこで太兵衛が思わず

「正体、見届けたぞ」

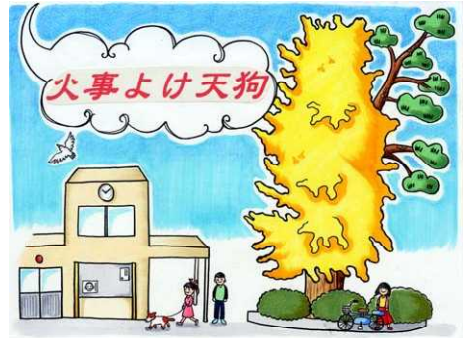
と叫ぶと、お嫁さんは家を飛び出し、蛇になって池の中に消えてしまいました。この池の水は蛇が飛び込むと同時に赤色^{あかほりいけ}に変わってしまったので、のちに赤堀池と呼ばれるようになったと言うことです。

おしまい



(3) 火事よけ天狗

春日部駅の西口、派出所の脇には大きなイチョウの木があります。このイチョウは秋葉神社のご神木で、となりの松の木とくっついているため夫婦松ともいわれています。もともとは、この木の下に秋葉神社の祠ほくらがありましたが、現在の神社は区画整理のためイチョウの木の南側、地下道脇に移動しています。



この神社には、不思議な伝説が残っています。ある晩、粕壁宿の名主さんの屋敷になにかがものすごい音をたてて落ちてきました。びっくりした名主さんがおもてに飛び出すと、庭には一人の天狗が立っています。名主さんは驚きましたが、家に招いてごちそうを出しました。すると、天狗はお礼として火事除けの神様として有名な遠江国とのおとうみのくに（現静岡県）秋葉神社のご神体をくれたのです。天狗が去ったあと、名主さんは天狗の落ちてきた場所に祠まつを建て、ご神体を祀りました。

数年後、この名主さんの家の近くで火事が起こりました。強い風に火の粉は舞い上がり、どんどんと燃え広がっていきます。

「大変だ！ もうすぐ名主さんの家にも燃え移るぞ！」
「早く火を消せ！」

町の人々は口々にわめきますが、どうすることもできません。
そのときです。



「あ、あれは誰だ？」

一軒の家の屋根に異様な人影が出現しました。慌てて名主さんが見上げると、それはあの日の天狗でした。天狗はしきりと火の粉を振り払うような仕草をしています。すると、なんと不思議なことでしょう。風向きが変わり、火事は見事におさまったのです。それ以後、名主さんは秋葉神社を一層大切にし、参詣する人も増えたということです。



おしまい

(4) 稲荷の本尊～とんできた仏さま

これは、春日部の浜川戸に春日部治部少輔時賢^{じぶしょうゆうときかた}という領主が住んでいたころのお話です。当時の利根川には中洲があり、村人から須賀島^{すがしま}と呼ばれていました。あるとき、この島から光が射すという不思議な事件が起きました。驚いた魚は逃げてしまい、漁師は仕事になりません。村人の訴えを聞いた領主が島を調べたところ、一本の朽ちかけた木の中に観音様の像を見つけました。不思議に思った領主は、その像を大事に持って帰りました。

それから数日後のことです。屋敷に旅の僧がやってきました。領主があのとときの観音像を見せるとひどく驚き、由来について語りだしました。この僧が言うには、実は、これは弘法大師というえらいお坊さんが唐の国から持ち帰り、備後の国（現岡山県）に安置したものだと言うのです。しかし、備後の国で戦が起こったため、寺の人々は船に像を積んで東のほうへ逃げることにしました。途中、嵐にあってたくさんの船が難破するなか、この船だけは無事に港に着くことができましたので、人々は皆、ありがたがりしました。しかし、像を拝もうとするとたちまちどこかへ飛び去ってしまったので、今の今までその場所がわからなかったと言うのです。領主は、不思議なこともあるものだと感心しました。そして、観音様が須賀島に飛んできたのはここにいたいと思ったからだろうと考え、前よりも一層あつくお祀りしたということです。

現在、この観音様は勝林寺^{しょうりんじ}というお寺に秘蔵されています。

おしまい

